

◎横浜の動物園

①ズーラシアのめざしたもの

堀 浩

1―はじめに

動物園は、子ども時代の思い出に、夢のあ
る楽しい場所として誰もが記憶の中に残って
いる施設の一つです。しかし、戦後の混沌と
した貧しい時代からはい上がり、その時代の
ことなど全く忘れてしまった現在でも動物園
だけは昔のまま、動物園が目指していた本
来の社会教育施設として課せられた目的は取
り残され、古い時代の「遊びのスポット」か
ら脱皮できず、横浜のイメージに合わないこ
の時代遅れの施設から、市民の動物園離れを
止めることができませんでした。

横浜の動物園が最も盛況だった昭和四十年
代は、横浜は高度成長の中、急激な人口増加
と子ども達の数も頂点に達していた頃で、子
ども達と家族でコミュニケーションをとれる

場所といえは動物園くらいしかないという状
況でした（写真）。

当時の動物園は、子ども達が健全で安心し
て遊べる場として重要な役目を担っていたの
ですが、日本自体が落ち着きを取り戻し、生
活形態も大きな家族から小さな家族へと変わ
り、年々子ども数が減り、生活の楽しみ方
も多岐にわたり、多くの娯楽施設や場所がで
き、遊園地では絶叫マシンなどこれまで経験
したことのない強烈な印象を与え、遊びとし
ての動物園は完全に時代から取り残された状
況になってしまいました。

昔から、動物園は一生に三回（親に連れら
れた幼児時代、学校の遠足、親となって子ど
もを連れてくる）行くところといわれました
が、今の時代、子どものために何処かに連れ
て行くというのではなく、親と子どもが一緒

に楽しめる大型のテーマパークや遊園地、幼
稚園や学校もバスの予約・天候なども考慮し
て、必ず実施できる屋根のある水族館や博物
館を選び、動物園に行くのは一生に一回とい
うよりも小敷点以下回という状況になってし
まいました。

平成十一年、横浜市に新しく動物園が開園
されました。

今更動物園でもないだろう等という声もあ
りましたが、これは戦後動物園が本路線から
はずれた運営をしなければならなかったいわ
ば寄り道をしてきた時代を一新し、動物園が
始まる明治時代の考えを反映させたスタイル
で、いわばスタート点に逆戻りした動物園な
のです。

ズーラシア開園初年度に二百万人を越える
入園者があり関係者を喜ばせましたが、これ

- ①ズーラシアのめざしたもの
- ②ズーラシアの役割・活動
- ③横浜動物の森公園・よこはま動物園の建設
事業について
- ④これからの動物園を思う

- 1―はじめに
- 2―動物園の変遷
- 3―新動物園建設のなりたち
- 4―飼育展示動物の収集
- 5―終わりに

昭和40年代の野毛山動物園



は動物園にとっておおいに考えさせられることで、新しい時代が来ているのだから、動物園もあの苦しい時代のままで止まっているのではなく、本来の姿に戻れという市民からの暖かいメッセージとして受け取らなければならないのです。

このメッセージを受け、新動物園の目指したことは間違いではなく、本来の役割を考え直し、一般娯楽施設ではなく教養娯楽施設として横浜市動物園を今一度考え直すために、新動物園(ズーラシア)の成り立ちなどを振り返ってみました。

2 動物園の変遷

動物園は、古代エジプトから中世代のヨーロッパを中心とした王侯貴族が収集した戦利品や、国内はもとより海外からの貢ぎ物として贈られた、生きた動物たちを飼っておくことから始まったといわれています。しかしこれはあくまでも個人のコレクションレベルでしかなく、「資料を教育的配慮のもとに収集し、一般に公開し、広く利用に供する」という動物園の本来の社会教育施設としての役割からはほど遠いものでした。

近代動物園の始まりは、十八世紀後半にオーストリアのウィーンにあるシェーンブルン宮殿で飼育されていた動物たちを、一般に公開したことによるとされていますが、一八二八年イギリスのロンドン動物園協会が、世界のあらゆる地域から動物(動物分類学の綱、目、科)を収集し、飼育展示して動物学の発展に寄与することを目的にロンドン動物園を

開設しました。このロンドン動物園が、純粋な動物園精神をもった現代動物園としての始まりであるといえます。

日本でも江戸時代には「見せ物小屋」として興行的にはあったようですが、恒久的な施設としては浅草の「花屋敷」がそれに当たるものかもしれません。大きな影響を与えたのは、慶応二(一八六六)年福沢諭吉の著書「西洋事情」の中に、パリの国立自然史博物館付属施設にあった陳列式の動物飼育施設(メナジェリー)でした。このメナジェリーを初めて「動物園」という単語で紹介しています。しかしこのメナジェリーは展示というストーリー性がなく、ただ珍しい動物を並べたという陳列だけの一般娯楽施設で、今でいう確かなコンセプトを持ち、ストーリーのある展示をした教養娯楽施設としての「動物園」とは異なっていました。

ロンドン動物園が開園して五十年後の明治十五年(一八八二年)、幾多の難問を解決し、当時の商務相が博物館と付属施設の動物園を上野公園に開園、その後宮内庁所管となり、大正十二(一九二二)年、昭和天皇ご成婚記念として東京都に下賜されました。これが上野動物園の前身で、次いで明治三十六(一九〇三)年に京都、大正四(一九一五)年に大阪、昭和三(一九二八)年に神戸など、大きな都市が次々に動物園を開園させましたが、横浜は昭和二十六(一九五一)年、野毛山遊園地の一部に動物を飼育して開園しました。

日本の動物園の歩みを動物園の変遷(図)と照らし合わせた場合、スタートは欧米に比べ五十年のハンデがあり、肩を並べるにはま

だまだ時間が必要かもしれませんが、動物園すべてが欧米動物園に比べ遅れたままではなく、かなり接近している分野もあると思われるが、肝心の土台部分にまだまだの感があります。

前述のとおり横浜市は他都市に比べ、動物園としてはまだ短い歴史しかありませんが、新動物園を語るにはもう少し詳しく横浜市の動物園を説明する必要があります。

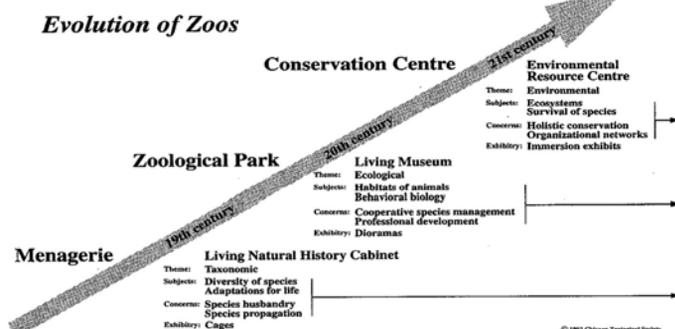
① 野毛山動物園

これまで日本の各都市にできた動物園は、ほとんどがその都市で開催した大きなイベントの跡地利用の形が多く、上野や京都以外ではじめから動物園を作る目的でできた動物園はほとんどありませんでした。横浜市もその例にもれず、昭和二十六(一九五二)年野毛山公園や反町公園を会場にして開催していた「貿易博覧会」が終了し、各々のブリスヤパビリオンは取り除かれましたが、博覧会に彩りを添えていたタヌキやクマなどの動物は処分することができず引き取り手もないことから、遊技物を残し遊園地とするので、とりあえず飼っておこうというのが発端だったので

同年、新しくアジアゾウやマントヒヒなどを購入し、野毛山遊園地として開園しました。当時横浜の人口は今ほど多くはなかったのですが、子どもの数は多く、健全な娯楽施設がなかったため、野毛山遊園地や動物園は格好の娯楽施設として家族で利用されていました。

昭和三十九年、横浜市の人口増加に伴い遊園地部分の地下にあった水道の貯・排水池の

動物園の変遷



拡張工事に入り、貯・排水池の上には大型の遊技物のような重量のあるものは設置することができず、動物園側を残し遊園地を廃止しました。

これを機に、動物園を博物館と同じく、社会教育施設として「何時でも、誰でも」のキヤッチフレンドをもとに入園料を無料として開放しました。

無料になったからでもないのでしょうか、入園者も一段と増え、動物園は毎年のように改築・改造され、昭和四十七年、遊技物の無い野毛山遊園地は名称を野毛山動物園とし、日本の動物園界からも動物園として受け入れられる様になりました。

② 万騎が原ちびっこ動物園

横浜市の都市化はどんどん進み、街からウシ、ブタ、ヤギ、ニワトリなどの家畜・家禽類（産業動物）が次々に姿を消し、子どもたちの動揺やお話のなかに出てくる動物たちは本やテレビでしか見ることができなくなってしまうました。

家畜を知ることにより野生動物との根本的な違いを遊びながら感じてもらうと、知的教養娯楽施設として、昭和五十四年、万騎が原のこども自然公園の中に「ちびっこ動物園」を開園しました。

内容は、動物に直接接するコンタクトコーナーをメインに、ウシ、ウマ、ブタ、ヤギ、ヒツジなどの家畜、そして日本の動物文化として天然記念物のニワトリを全品種収集し展示しました。

もちろん家畜を展示するのですから、社会

教育施設としての教育プログラムとして、人間とのかかわりも必要で、搾乳とか乗馬など計画したのですが、残念ながら横浜では時期尚早だったのか受け入れられず、ヒツジの毛刈り、毛糸作りなど一部が採用されたに過ぎず不完全なものになってしまいました。当時の横浜としてはこの程度のものであったでしょう。

このように、都市化が急激に進んだ都市では「こども動物園」として同様な目的をもつ例は、横浜市だけでなく国内はもとより外国でも多くみられます。この動物園を建設するに当たり参考としたアメリカ合衆国シカゴ市のリンカーンパーク動物園でも、ウシを飼育している小屋には「ステークハウス」と表示され、牛乳や肉などを教えることにより「動物（人間も含め）」とは、生き物の犠牲の上になり立つ」ということを伝え、家畜と野生動物の違いをはつきりと教えています。

③ 金沢動物園

万騎が原ちびっこ動物園の開園に伴い、将来の動物園を考え始めました。野毛山動物園は地理的に北向き斜面で冬季には厳しく、希少な動物たちの繁殖季節に影響があること、傾斜角度が強いため大型動物を飼育する平地の確保が難しいことなどから、自然資料としての動物を収集するのが困難になることは見えていました。そこで、ほかの場所に繁殖センターを設けなければ、動物園がただの見せ物小屋となることは必須と考え、金沢の円海山付近に大規模公園の建設計画があったので、それに繁殖センターを併設することにし、

昭和五十六年に本格的な工事に入り、野毛山動物園の分園として金沢自然公園の中に位置づけられていましたが、完成した昭和六十三年に横浜市の第三番目の動物園として独立しました。

建設時の都市化と人口増加は横浜にとどまらず、近隣特に横須賀、三浦などにも及んでいたもので、隣接都市の子ども達にも動物園として利用してもらおうと、非公開に計画していた繁殖センターを、急遽動物園に計画変更となりました。これは、東京都が上野動物園の繁殖センターとして多摩に計画したものを、多摩動物公園として昭和三十三年に開園したのに似ています。

金沢では同じ展示形式の動物園にせず、土地の形状から展示はジオラマ展示を取り入れ、形態を動物地理学的手法で、野毛山動物園やちびっこ動物園では飼育できない希少性の高い有蹄動物を飼育展示する専門動物園としました。横浜では三つ目の動物園であり、野毛山動物園は子ども達の動物に対する選択肢を多くするために狭い場所に多くの動物を展示していましたが、ちびっこ動物園では子どもだけでなく小学校の高学年から中学生を対象として家畜と野生動物を考える場とし、金沢は大人が海を見ながら散歩途中に見られる公園的なデートスポットとしての動物園をイメージして作られました。

④ 新動物園（ズーラシア）

昭和二十六年開園した野毛山動物園は四十年を経過し、動物園としても狭い空間に鉄檻を並べ、スタンプロレクション展示といわれ

横浜市の動物園

1 野毛山動物園	昭和26 (1951) 年開園
2 野毛山動物園の分園として 万騎が原ちびっこ動物園	昭和54 (1979) 年開園
3 野毛山動物園の分園として 金沢自然公園動物区 金沢動物園	昭和57 (1982) 年開園 昭和63 (1988) 年独立
4 よこはま動物園ズーラシア	平成11 (1999) 年開園